

北海道焼尻島東浜海岸へ打ち上げられた火山岩穿孔礫

圓谷 昂史¹・藤村 祐輔²・鈴木 明彦²

A bored volcanic cobble washed ashore on Higashihama beach, Yagishiri Island, Hokkaido

Takafumi ENYA¹, Yusuke FUJIMURA² and Akihiko SUZUKI²

穿孔性二枚貝は、岩石やサンゴや木材をその主な穿孔基質としている(田島・近藤 2003)。このうちカモメガイ科の二枚貝は、泥岩、砂岩、石灰岩など比較的軟質な岩石に穿孔するが、ごく稀には火山岩や深成岩のような硬質の岩石にも穿孔することが知られている(増田・松島 1969; 伊藤 1994)。今回北海道で初めて二枚貝に穿孔された火山岩礫を発見したので報告する。

2013年9月1日に北海道の焼尻島東浜海岸(北緯44° 25' 45", 東経141° 25' 22")で、打ち上げられた火山岩礫(図1)を採集した。この礫は、中礫サイズ(78.3×72.4×55.3mm)の垂円礫である。肉眼観察では、暗灰色～灰緑色を呈し、斜長石のほか普通輝石やシソ輝石の斑晶が含まれることから、両輝石安山岩に同定した。安山岩礫は焼尻島東部海岸に分布する最上部溶岩(秦 1960)に由来するものと考えられる。

礫の表面には比較的大きな穿孔痕があり、礫内部に深く侵入している(図2A)。そこで礫を切断し、歯科用印象材デントシリコンを用いて穿孔痕の雄型を作成した。観察された穿孔痕の形態はフラスコ状である(図2B)。入口は小さいが、底部に向かって広がる。開口部の径は18.0mm, 底部の径は24.0mm, 長さは48.0mmである。このような特徴から、生痕属 *Gastrochaenolites* isp. に同定される(Kelly and Bromley 1984)。

北部北海道において、硬質の岩石に穿孔する可能性のある二枚貝として、カモメガイ *Penitella kamakuren-*

sis とヨコヤマスズガイ *Nettastomella japonica* があげられる(田島・近藤 2003)。これらの生痕を見ると、前者が大型のフラスコ状であるのに対し、後者は小型で球状であるので、今回の生痕はカモメガイによるものと考えられる(Kelly and Bromley 1984)。今後貝殻の入っている標本を採集し、生痕形成者を特定したい。なお、本州ではカモメガイによる火山岩への穿孔例(増田・松島 1969)があるが、北海道では初めての報告となる。

引用文献

- 秦 光男 1960. 5万分の1地質図「焼尻島」及び同説明書, 24pp. 地質調査所, 東京.
- 伊藤泰弘 1994. 穿孔性二枚貝カモメガイの形態変異と岩石の硬さとの関係. 日本ベントス学会誌 47: 23-36.
- Kelly, S. R. A. and Bromley, R. G. 1984. Ichnological nomenclature of clavate borings. *Palaeontology* 27: 793-807.
- 増田孝一郎・松島義章 1969. 神奈川県真鶴岬の火山岩に穿孔する二枚貝について. *Venus* 28: 101-108.
- 田島智幸・近藤康生 2003. ニオガイ科二枚貝の機能形態と穿孔基質の関係. 化石 (73): 5-19.

(Received Feb. 20, 2015; accepted Mar. 25, 2015)

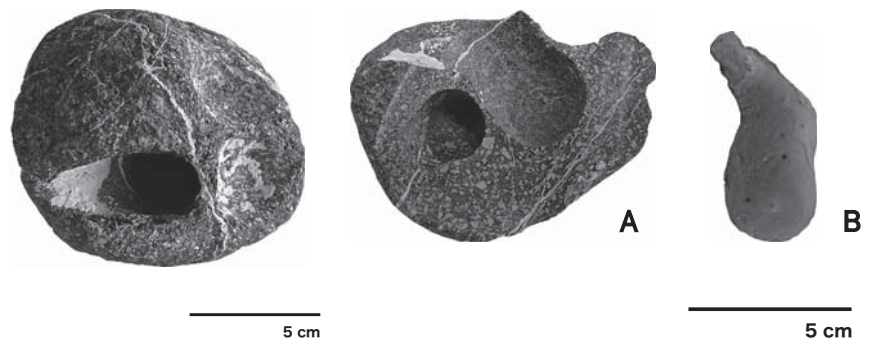


図1 穿孔された安山岩礫

図2 A. 安山岩礫の断面.

B. 生痕の型取り標本(シリコン樹脂)

¹ 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 北海道博物館

¹ Hokkaido Museum, 53-2 Konopporo, Atsubetsu-cho, Atsubetsu-ku, Sapporo 004-0006, Japan

² 〒002-8502 札幌市北区あいの里5-3-1 北海道教育大学札幌校

² Sapporo Campus, Hokkaido University of Education, 5-3-1 Ainosato, Kita-ku, Sapporo 002-8502, Japan